

ことで多くの地点を同時に比較できるようになれば、より詳細に地域差や変遷過程が明らかになると考えられる。今後の社寺におけるカメ類相のデータの蓄積と研究の進展に期待したい。

#### 引用文献

矢部隆. 2007. 名古屋市川原神社境内の池における外来カメ類の増加と、その対策に地域コミュニティが果たした役割. コミュニティ政策研究 9 : 21-39.

## 日本国内におけるニホンスッポンの産卵巣の食害例

加賀山翔一<sup>1</sup>・西堀智子<sup>1,2</sup>・久米卓美<sup>1,2</sup>

<sup>1</sup> 617-0837 京都府長岡京市久貝2-2-22 淡水生態研究所  
<sup>2</sup> 599-8232 大阪府堺市中区新家町548-21 和亀保護の会

A field observation of nest predation of the Japanese soft-shell turtles(*Pelodiscus japonicus*) in Japan.

By Shawichi KAGAYAMA<sup>1</sup>, Tomoko NISHIBORI<sup>1,2</sup>, and Takumi KUME<sup>1,2</sup>

<sup>1</sup> Institute of freshwater ecological research, 2-22 Kugai 2-chome, Nagaokakyo, Kyoto, 617-0837, JAPAN

<sup>2</sup> Wagamehohonokai, 548-21 Shinkecho, Naka-ku, Sakai, Osaka, 599-8232, JAPAN

多くのカメ類は卵から幼体にかけて若齢期に哺乳類や鳥類、爬虫類、両生類、魚類、昆虫類等の様々な捕食者(Ernst and Lovich, 2009)による捕食等によってその多くが死亡するため、孵化率や若齢期の生存率は非常に低い(例えば, Gibbons, 1968; Iverson, 1991). 日本に生息する淡水生カメ類では、在来種のニホンイシガメ、外来種のクサガメやアカミガメ等のカメ類は卵から幼体にかけて若齢期に哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、魚類、軟甲類、昆虫類等の様々な分類群の野生動物に捕食される(加賀山・小賀野, 2021). 中でも、ニホンイタチ、ホンドタヌキ、イエネコ、カラス類、シマヘビ等の捕食者によって、卵が食害されていると考えられている(加賀山・小賀野, 2021).

日本国内には在来種ニホンスッポン(*Pelodiscus japonicus*)が生息しているが(Suzuki and Hikida, 2014), これまでに本種に対する捕食者や被食事例を報告した学術論文は見当たらない(加賀山・小賀野, 2021). 今回、食害を受けたニホンスッポンの産卵巣を発見したため、ここに報告する。

2023年7月23日の10時15分頃、兵庫県加古川市にある寺田池の水際から約3mの草地において、何らかの捕食者に掘り起こされたカメ類の産卵巣を発見した。産卵巣のそばには約10個分の食い破られた卵の殻と(図1A), 産卵巣の中から食害を免れた卵を3個発見した(図1B). 卵はピンポン玉のような真円に近い形状をしており、ニホンスッポンの卵の特徴を有していた。これら3個の卵を回収し、筆者(西堀)の自宅で孵卵を試みたところ(図1C), 回収日から約50日後に2個の卵からニホンスッポンと思われるカメが生まれた(図1D).

今回発見された産卵巣において、自動撮影カメラによる撮影や足跡等の痕跡調査行っていないため、産卵巣及び卵を食害した捕食者は不明である。しかしながら、産卵巣の周囲に食い破られた卵の殻が落ちていたことから、卵に噛みつく、または嘴でつつく哺乳類や鳥類等の捕食者によるものであると考えられる。特にため池周辺では別の産卵巣を荒らすカラス類を地元の住民が目撃したこともあり(西堀, 未発表), 今回の捕食者もカラス類である可能性が考えられる。



図1. ニホンスッポンの産卵巣と孵化個体 (A) 捕食された卵, (B) 捕食を免れた卵, (C) 回収後に孵卵を試みた卵, (D) 孵化した幼体 白色の矢印は掘り返された産卵巣を示す。

産卵巣の周囲に散乱した卵の殻や無傷の卵を合わせると、その数は約13個分であった。ニホンスッポンは6～8月にかけて8～50個ほどの卵を産むとされており(関・疋田, 2016), 今回確認された卵数はこの範囲内に収まる。しかしながら、著者らが確認する前にシマヘビ等の捕食者によって卵が丸呑みされたり(小賀野, 2021), 持ち去られた等の可能性もある。そのため、今回得られた観察結果は必ずしも一腹卵数を表していない点に注意が必要である。

なお、日本国内には在来種のニホンスッポンに加え、中国大陸を原産とする外来種のチュウゴクスッポン(*P. sinensis*)の定着が確認されているが(Suzuki and Hikida, 2014), 今回得られた卵や幼体の形態的特徴から種を判別することができなかった。従って、今回発見した卵がチュウゴクスッポンのものである可能性があることにも留意する必要がある。

#### 引用文献

- Ernst, C. H. and J. E. Lovich. 2009. *Turtles of the United States and Canada*. JHU Press, Baltimore. 827p.
- Gibbons, J. W. 1968. Population structure and survivorship in the painted turtle, *Chrysemys picta*. *Copeia* 1968 (2): 260–268.
- Iverson, J. B. 1991. Patterns of survivorship in turtles (order Testudines). *Canadian Journal of Zoology* 69: 385–391.
- 加賀山翔一・小賀野大一. 2021. 日本に生息する淡水性カメ類の捕食者に関する文献調査. *爬虫両棲類学会報* 2021(1):36–43.
- 小賀野大一. 2021. シマヘビに捕食された淡水性カメ類の卵. *亀楽* 21:15.
- 関慎太郎・疋田努. 2016. 野外観察のための日本産爬虫類図鑑. 緑書房 東京. 206p.
- Suzuki, D., and T. Hikida. 2014. Taxonomic status of the soft-shell turtle populations in Japan: a molecular approach. *Current Herpetology* 33 (2): 171–179.